（第3種郵便物認可）

健康リサーチ

薬剤師の診断力向上

大分大病院が研修

在宅医療普及に備え

効果や副作用 正確に把握

大分大学病院薬剤部（伊東弘樹教授）は大分県薬剤師協会（安東哲也会長）と協力して、薬の副作用の影響などを的確に判断できる薬剤師を育成する研修を進めている。高齢化の進展に伴う在宅医療の普及に備えて薬剤師が診断法などを学ぶのは全国でも珍しいという。

血圧計や聴診器の使い方を学ぶ薬剤師

医師の処方せんを基に薬剤を調合するのが薬剤師の主な業務。加えて、処方せんなどの情報をまとめて管理する「お薬手帳」の普及や、薬の情報提供や飲み合わせなど適切な服用の指導が求められている。高齢化社会を迎え、複数の医療機関で多数の薬を処方されて管理ができなくなっている高齢者が増加しているためだ。

一方で、在宅や病院内で医師や看護師、リハビリスタッフなどと連携して患者の全身状態を考慮しながら治療やケアに当たるチーム医療が進んでいる。薬剤師は処方だけでなく、薬の効果や副作用を正確に把握することも重要になる。

大分大学病院薬剤部は昨年から、呼吸や脈拍、血圧などのデータを基に患者の健康状態を学ぶフィジカルアセスメント講習会を始めた。「循環器」や「消化器」「神経内科」などテーマごとに年数回開催。大学病院の各診療科の医師が、病気に特徴的な体の異常や所見などを解説している。

8月、大分大医学部であったフィジカルアセスメント講習会には、県内の調剤薬局で働く薬剤師ら約20人が参加。心臓や血管を通じて全身に血液を送る循環器系の病気と糖尿病について学び、聴診器の心音で心臓疾患を聞き分ける方法などを学んだ。

受講した津久見市の薬剤師橘周平さんは「訪問診療で患者の自宅を訪ねることがある。現場に出ると、一人一人精神的、身体的な状況を考慮しながら判断しなければならないため、難しさを感じている。講習で学んだことに経験を重ねて体の異常などに早く気付けるようにしたい」と話した。

伊東教授は「チーム医療や在宅では、服薬後の副作用を迅速に判断して対応する必要があり、患者の全身状況を把握することは重要になる。講習会を通じてチーム医療を支える県内の薬剤師を育てていきたい」と話した。

▼健康短信▲

◇JA大分厚生連鶴見病院の糖尿病教室◇9月1日午後1時から南館5階研修ホールで。専門医や管理栄養士が病気の特徴や検査法、食事や生活での注意点、治療法などを説明する。申し込み不要で入場無料。問い合わせは同病院看護科（☎0977・23・7111）。